＜序文＞

－日本－それは摩訶不思議な国。しかし、当の日本人はその異質さに気付いていない。海外から指摘されて初めて、その異質さに気付かされる。

2011 年 3 月 11 日は日本人にとって忘れられない、忘れてはならない日となったが、皮肉にもこの大震災が、忘れかけた日本人としての DNA を呼び覚ましてくれたようである。理路整然として騒ぐこと無く、自らが困っていても、他を気遣って助け合う。場合によっては、自らを顧みることも無い。他の国なら、暴行略奪が蔓延することだろう。しかも、誰からも命令されること無く、自主的に成されたのである。これは驚くべきことで、経済以外の面で世界中が日本に注目し始めた。一体、日本という国は何なのか？神の恩寵の国なのか？と。

その後、戦後の GHQ 押し付け教育の結果、今まで自国のまともな歴史や神話すら知らずに育った世代、特に若者の世代で、この国、日本について知ろう、勉強しよう、という気概が生まれてきたことは、大変好ましいことである。

しかし、この国について知ろうとするほど、謎が深まるばかりである。そして、追求していくと、最終的には皇室と神社神道の真相問題といった、ベールに隠された世界へと辿り着く。かく言う筆者もまた、その大きな壁に突き当たった者の一人である。

そんなある時、書店で手にしたのが飛鳥昭雄氏の一連の著書「学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ」だった。特に、“天照大神はイエス・キリストだった”という内容に衝撃を受けたのだが、著書が分冊になって理解しがたい部分もあり、どこかに矛盾があるのではないか？と疑ってまとめ始めた。それが、このような資料を作成することになったきっかけである。そして、大筋に於いては矛盾が無いことを確認し、今までに読んだこともなかった聖書も購入して、一通り読んだ次第である。

これで日本の真相について解ったと思っていたところ、飛鳥氏の著書に登場する元伊勢・籠（この）神社の海部（アマベ）宮司が、あるホームページでたった一言おっしゃっているのを発見した。「シュメールについて研究することをお勧めします」と。そこで、シュメールについて一から真剣に見直すこととしたのである。

だが、如何せん、参考となる資料が少なすぎる。また、古代オリエントの神話・伝承も様々で、どれが正しいのかどうかの判別もつかない。そこで、以前から持っていたゼカリア・シッチン氏の著書を見直したのだが、それもまた、混乱している部分が多々見受けられた。しかし、ちょうど良いタイミングで氏の最新刊が発刊され、聖書の記述などが極めて理解しやすく、これこそが大元なのでは？と思われたのである。また同時に、古代オリエント研究の大家であらせられる三笠宮殿下の一連のご著書も入手して考察したところ、やはり日本のルーツはシュメールにありそうだ、という考えに至った次第である。

飛鳥氏やシッチン氏は、いろいろ噂されている。しかし、最も統一性があると感じられたのはシッチン氏の最新刊で、日本に於ける様々な神事も説明でき

そうな予感がした。そこで、取りあえずそれを基本とし、前提として、様々な事象が説明可能かどうかを検証した。もし、前提が間違っているのなら、どこかで必ず矛盾が生じるはずだ、と。すなわち、様々な事象が次々に説明可能ならば、その前提は正しい、という帰納的方法論を採った。前述のように、文明発祥とされる古代オリエントでさえ、神話・伝承が混乱しているのだから、直接的な演繹的手法を採ることはできず、このような帰納的手法で考察せざるを得ないのである。

更に、本論ではユダヤ神秘主義カバラ（原音に近い発音ではカッバーラ）を駆使して考察している。それにより、その事象が何を言わんとしているのか、理解の助けになるし、これこそが、歴史の真相を紐解く鍵なのである。言い換えれば、カバラの理解無くして、シュメールを理解せずして歴史の真相を紐解くことはできない。

本論は、まず飛鳥氏の主張のまとめに始まり（日本の真相)、その理解の助けとして、各宗教の概論をその前に提示する。その後、シュメール、エジプト、インダス、マヤなどと世界的な文明を考察し、その後、いよいよ日本の核心に触れていく。それらの概要は目次に示されているが、各資料は前資料の理解を前提としているので、目次に示された順に読んでいく必要がある。

内容的には、まったく従来の観念を否定するようなものであり、読者の中には、とりわけ何かの信仰心を持たれている方にとっては、自らを頭から否定されてしまったような印象を受ける部分もあるかもしれない。しかし、それはあくまでも筆者の考え、ということで、お許し願いたい。

また、聞き慣れない名称・用語が続出するので、なかなか先に進めないこともあるだろう。読むコツとしては、まずはそういったものに気を取られること無く、すぐに忘れて読み進めることである。重要な名称・用語は何回も登場するので、ご安心頂きたい。そして、最後まで読んでから読み直すと、最初に読んだ時とは別の観点から読めるように書いたつもりではあるが、何分、文筆は素人なので、解りくい点などはご容赦頂きたい。また、相当の注意を払ってはいるものの、誤字・脱字等があったら、それもご容赦願いたい。

前述のように、本論は従来の観念を否定するようなものであり、まったく新たな視点を要求するものである。それ故、固定観念を持つこと無く、頭の中を白紙にして読んで頂きたい。

言わば本論は、既存概念を打ち破る剣のようなものである。この一連の資料の“一振り”により、様々な議論が活発化し、日本の真相、そして人類史の真相が解明されていくことになれば、幸いである。

尾張國の熱田の地にて